学習意欲が定期試験成績に及ぼす効果

Effect of Willingness to Learn on Regular Examination Results

吉澤 隆志¹⁾ 太田 信夫²⁾ 藤沢しげ子³⁾

TAKASHI YOSHIKAWA¹⁾, NOBUO OOTA²⁾, SHIGEKO FUJISAWA³⁾

¹⁾ Department of Physical Therapy, Yachiyo Rehabilitation College: 11-1-30 Yachiyodaikita, Yachiyo City, Chiba 276-0031, Japan. TEL +81 47-481-7320 FAX +81 47-481-7321

²⁾ The University of the Air, Graduate School

³⁾ Department of Physical Therapy, Faculty of Science, International University of Health and Welfare

Rigakuryoho Kagaku 23(2): 249-253, 2008. Submitted Oct. 1, 2007. Accepted Nov. 9, 2007.

ABSTRACT: The object of this study was to examine the effect of willingness to learn on the results of regular examinations. The subjects were 2nd year students of our college: 41 day school students and 40 night school students. We chose external motivation, internal motivation, health condition (in particular, mental health), interpersonal relationships and suitability for college as factors of willingness to learn. Then, we examined their effects on the results of regular examinations. We observed a positive relationship between suitability for college and the results of the regular examinations among night school students. Accordingly, we consider that it will be necessary, for the future instruction of students, to actively accustomize students to classes and college with class teachers playing a lead role in this. We should also consider the design of the instruction methods.

Key words: willingness to learn, regular examination results, suitability for college

要旨: 本研究の目的は、学習意欲が定期試験成績に及ぼす効果を調べるものである。対象は、当学院理学療法学科2年生、昼間コース学生41名および夜間コース学生40名とする。ここで、学習意欲要因としては、外発的動機づけ・内発的動機づけ・健康度（特に精神的健康度）・対人関係・学院への適応度の5つを挙げた。次に、これらの学習意欲が定期試験成績に及ぼす効果について調べた。結果としては、夜間コース学生において学院への適応度と定期試験成績との間に正の関係が見られた。よって、今後の学生指導としては、担任を中心として学生がクラスや学院に馴染めるような配慮を積極的に行っていく必要があると考える。加えて、授業方法の工夫も考慮していきたいと考える。

キーワード: 学習意欲、定期試験成績、学院への適応度

¹⁾ 八千代リハビリテーション学院 理学療法学科：千葉県八千代市八千代台北11-1-30 (〒276-0031)
TEL 047-481-7320 FAX 047-481-7321

²⁾ 放送大学大学院

³⁾ 国際医療福祉大学 保健医療学部理学療法学科

受付日 2007年10月1日 受理日 2007年11月9日

I. はじめに

近年の理学療法士・作業療法士養成校の増加に伴い、様々なタイプの学生が入学するようになってきた。更に、現在の学生状況を見ていると、種々の要因が学業成績に影響を及ぼしていると感じる。また、教員間で学生の学習意欲（いわゆるモチベーション）について話題にのぼることも多い。

学習意欲は、大きく内発的動機づけと外発的動機づけに大きく分けられる¹⁾。内発的動機づけ（intrinsic motivation）は、「好奇心に基づくものであり、行動すること自体が目標になっている。」とされ²⁾、教育における重要な動機づけとして提言されて以来、学校教育に関連して広く認識されてきている。一方、外発的動機づけ（extrinsic motivation）は、「賞あるいは罰によって動機づけられるもので、行動は目標に到達するための手段という意味を持っている。」とされる³⁾。これまで、この2つの概念は対立的なものとされてきたが、最近では、行動自体が目的であるかの目的性と、あるいは手段から目的へと移行するかの手段性の視点で区分され、明確な分類はしがたいとの指摘がある¹⁾。他に、学習意欲を支える要因として、健康度（特に精神的健康度）、対人関係、学院への適応度が挙げられる^{3,4)}。

ここで、昼間および夜間コース学生における学習意欲が定期試験成績（分野毎）について及ぼす効果について調べた研究はほとんどない。そこで今回、学習意欲と定期試験成績の関係について調べ、若干の知見を得たので、ここに報告する。

II. 対象と方法

対象は、当学院理学療法学科昼間コース2年生41名“男性22名・女性19名、年齢 22.6 ± 4.0 歳”（以下、昼間学生）、および、夜間コース2年生40名“男性33名・女性7名、年齢 27.1 ± 5.9 歳”（以下、夜間学生）とする。

学習意欲に関するアンケート内容については、既存の尺度を使用した⁵⁻⁷⁾。外発的および内発的動機づけについては『達成動機測定尺度』、精神的健康度については『無力感尺度』、対人関係については『KISS-18』、学院への適応度については『学校生活満足度尺度』を用いた。今回、それぞれの尺度を合計して102項目のアンケートを作成した（表1）。ここで、実際の尺度における回答用の選択肢は、それぞれ5～7つであるが、今回のアンケートについては5つに統一した。また、『達成動機測定尺度』は、本来、社会的達成要求と個人的達

成要求を測定するものであるが、本研究においては、Ryan & Deciの考え⁸⁾により、それぞれを外発的動機づけおよび内発的動機づけと見なすこととした。

昼間学生においては7月13日、夜間学生においては7月19日にアンケートを実施した。アンケート記入は、予め「アンケート結果は成績とは全く関係はない。」ことと、「アンケートには氏名等を記入してもらうが、他の教員に対して個人的なデータを示すことは決して行わない。また、発表等に使用する際には、個人情報保護のため結果を統計的に処理し、個人名が全く分からないようにする。」ことを十分に説明した後に、記名にて行った。

定期試験成績については、平成18年度前期試験における成績を参照した。当該試験は、7月31日から8月18日まで行われた。昼間学生においては、専門基礎分野6科目・専門分野7科目、夜間学生においては、基礎分野1科目・専門基礎分野6科目・専門分野2科目の試験が行われた。これらの結果について、専門基礎分野と専門分野および基礎分野・専門基礎分野・専門分野の合計（以下、合計点）における成績の平均点を算出した。ここで、夜間学生の基礎分野については、受験科目が1科目のみだったため、研究対象としていない。昼間学生については、カリキュラムの関係で基礎科目の受験はなかった。

ここで、昼間学生と夜間学生における学習意欲の関係について調べた（Mann-WhitneyのU検定）。次に、学生をアンケート結果の上位群と下位群（各々約15名）とに分けた。そして、アンケート結果の上位群・下位群における定期試験成績の関係について調べた（分散分析）。なお、統計解析には、統計ソフトjmp6（SAS Institute Japan株式会社）を用いた。

III. 結果

昼間学生におけるアンケート結果は、外発的動機づけ 30.6 ± 6.8 点、内発的動機づけ 53.4 ± 7.4 点、精神的健康度 121.5 ± 21.2 点、対人関係 58.1 ± 10.0 点、学院への適応度 72.2 ± 7.2 点であった。同様に、夜間学生におけるアンケート結果は、外発的動機づけ 32.7 ± 8.2 点、内発的動機づけ 50.4 ± 8.2 点、精神的健康度 121.8 ± 19.7 点、対人関係 57.1 ± 9.8 点、学院への適応度 68.8 ± 11.8 点であった（表2）。ここで、昼間学生と夜間学生における、学習意欲の差について有意差は見られなかった。

また、表3、4に昼間・夜間学生におけるアンケート結果上位群と下位群の定期試験成績を記す。ここで、

表1 実際のアンケート（一部抜粋）

設問：下記の質問に対して、自分の気持ちに最も当てはまるものを、数字からひとつ選んで○をつけて下さい。

1. 全然当てはまらない	4. 少し当てはまる
2. あまり当てはまらない	5. 非常によく当てはまる
3. どちらともいえない	

1 いつも何か目標を持っていたい。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
2 後悔するようなことをよくやる。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
3 人と競争することより、人とくらべることができないようなことをして自分をいかしたい。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
4 私はクラスで行なう活動には積極的に取り組んでいる。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
5 内気でものごとに消極的だ。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
6 就職する会社は、社会で高く評価されるところを選びたい。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
7 仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められる。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
8 他人よりも頭が良いと思う。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
9 学校生活で充実感や満足感を覚えることがある。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
10 不器用で何をやっても下手だ。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
11 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうである。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
12 ちょっとした工夫をすることが好きだ。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
13 自分は人よりダメだと思うことがある。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
14 私はクラスの中で存在感があると思う。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
15 人を指導していく力がある。	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5

表2 昼間および夜間学生におけるアンケート結果

	昼間学生 平均値と SD	夜間学生 平均値と SD	範囲（点）
① 外発的動機づけ（社会的達成欲求）	30.6 ± 6.8	32.7 ± 8.2	10-50
② 内発的動機づけ（個人的達成欲求）	53.4 ± 7.4	50.4 ± 8.2	13-65
③ （精神的）健康度	121.5 ± 21.2	121.8 ± 19.7	41-205
④ 対人関係	58.1 ± 10.0	57.1 ± 9.8	18-90
⑤ 学院への適応度	72.2 ± 7.2	68.8 ± 11.8	20-100

学習意欲と定期試験成績との関係については、夜間学生において学院への適応度における専門基礎分野・専門分野・合計点への関与が示唆された。

IV. 考 察

この研究は、学習意欲と定期試験成績の関係を調べるものである。その結果として、夜間学生において学

院への適応度と定期試験成績に関して正の関係が見られた。ここで、昼間学生において、学院への適応度と定期試験成績の間に有意差が見られなかった理由は、昼間・夜間の定期試験の難易度の差ではないかと考える。参照した定期試験成績は、結果的には昼間学生の方が平均点が高く、標準偏差も小さかった。このことが、検定結果に影響を及ぼしたのではないかと考える。リハビリテーション分野の専門学校では、カリキュ

表3 昼間学生におけるアンケート結果上位群と下位群の定期試験成績

		専門基礎 分野	専門 分野	合計点
① 外発的動機づけ	上位群	78.1	82.9	80.7
	下位群	76.1	81.0	78.7
② 内発的動機づけ	上位群	76.3	81.7	79.2
	下位群	76.8	81.7	79.4
③ 健康度	上位群	78.4	83.3	81.0
	下位群	75.5	81.4	78.7
④ 対人関係	上位群	78.2	82.5	80.5
	下位群	74.7	79.9	77.5
⑤ 学院への適応度	上位群	78.8	83.4	81.2
	下位群	74.7	79.3	77.0

表4 夜間学生におけるアンケート結果上位群と下位群の定期試験成績

		専門基礎 分野	専門 分野	合計点
① 外発的動機づけ	上位群	77.0	73.3	77.1
	下位群	76.9	74.6	77.5
② 内発的動機づけ	上位群	78.5	77.9	79.3
	下位群	76.4	72.2	76.5
③ 健康度	上位群	77.8	75.2	78.2
	下位群	75.9	72.8	76.4
④ 対人関係	上位群	77.7	76.1	78.2
	下位群	76.5	73.5	76.9
⑤ 学院への適応度	上位群	78.9	77.4	79.4
	下位群	74.2	69.0	74.3

*p<0.1, **p<0.05

ラムの関係によりクラス単位で活動することが多い。つまり、学生にとっては、クラスでの生活が学院での大半の時間を費やすものとなる。ここで、北尾³⁾は「自己強化は外的強化に匹敵するぐらいの効果を持ち、とくにその効果が永く続く。」と述べている。また、大竹⁹⁾は「われ先にできることを競っている授業では、教室は競争の原理のみが支配し、特にできない生徒は極めて防衛的となり、授業への参加どころではなく、学習意欲を失ってしまう。」と述べている。また、三隅³⁾の質問紙を用いた研究においては「学習意欲要因として、学級連帯性が高く、学校不満が低いほど望ましい。」とされている。だとすれば、クラスへの適応が困難であり良好な友人関係が築けない場合においては、どうしても疎外感を感じてしまい、自身の学習に対するmotivationの低下に繋がる恐れがあると考えられる。同様に、自らが学ぶ学院に対し前向きに考えることが出来ない場合においても、積極的に勉学に取り組む意思が低下してしまう可能性があるとし唆される。よって、我々教員としては、担任を中心として学生がクラスや学院に馴染めるような配慮を積極的に行っていく必要があると考える。加えて、授業方法の工夫として協同学習の導入が挙げられる^{10, 11)}。そうすることにより、学習者が互いの成長を喜び合い、援助し合うことのできる仲間関係を築くための促がしが行えると考えられる。

ここで、今回の研究では、夜間学生における学習意欲との関係は、専門基礎分野・専門分野共に見られた。分野毎の特色として、基礎分野は基礎学力の影響が大きく、専門分野は基礎学力と学習意欲に加えて、医療

に携わるための資質的なものも重要であると考えられる。そして、専門基礎分野は、解剖学・生理学という比較的に暗記量が影響する分野でもある。また、専門分野は理学療法の治療手技を含む総合的な学習が必要となる。そのため、学習意欲が高く、勉学に取り組む姿勢が良い学生に成績の向上が見られたと考える。

また、長瀬¹²⁾は「子どもであれ大人であれ、学習が成果を上げる最大の要因は学習者自身の主体的な学習意欲や態度にあることに疑う余地はない。」と述べている。今回の研究により、学習意欲の関与は伺えたが、昼間・夜間学生に同様の結果を見出すことは出来なかった。更に、今回は試験科目の関係により、学習意欲と基礎分野との関係についての関係を調べることが出来なかった。今後、同様の研究を、対象学生を増やすと共に基礎分野についても行っていきたいと考える。

引用文献

- 1) 松田浩平, 佐藤恵美: 文京学院大学生における学習への動機づけと試験成績の原因帰属. 文京学院大学研究紀要, 2004, 6(1): 149-166.
- 2) 下山 剛: 学習意欲の見方・導き方. 教育出版, 東京, 2000, pp1-27.
- 3) 北尾倫彦: 学習指導の心理学. 有斐閣, 東京, 1993, pp160-162.
- 4) 下山 剛: 学習意欲の見方・導き方. 教育出版, 東京, 2000, pp24-27.
- 5) 堀洋 道, 山本真理子, 松井 豊・他: 心理尺度ファイル. 垣内出版, 東京, 1994, pp172-175, 535-539.
- 6) 堀洋 道, 大石千歳, 片山美由紀・他: 心理測定尺度集 II.

-
- サイエンス社，東京，2001, pp170-174.
- 7) 堀洋 道，井上果子，遠藤公久・他：心理測定尺度集III. サイエンス社，東京，2001, pp392-396.
- 8) 梶田正巳，吉田直子，鋤柄増根・他：学校教育の心理学. 名古屋大学出版会，愛知，2002, pp88-93.
- 9) 高旗正人，大滝睦夫，大竹敏夫・他：人間関係をつくる力を育てる. 黎明書房，愛知，2000, pp27-28.
- 10) 滝沢武久，牟田悦子，三浦正樹・他：はじめての教育心理学. 八千代出版，東京，2003, pp92-96.
- 11) 北尾倫彦：自己教育力を育てる先生. 図書文化社，東京，1986, pp91-108.
- 12) 長瀬莊一：関心・意欲・態度（情意的領域）の絶対評価. 明治図書，東京，2003, pp44-50.